「神の忍耐」
（マタイによる福音書 13:24-30,36-43）
今日の福音でも、主イエスは天の国をたとえ話によって示されました。
敵が夜の内に毒麦を蒔いてしまいます。それを知った僕たちは、「毒麦を抜き集めましょうか」と主人に問いますが、主人はそれを望みません。「麦も一緒に抜くかもしれない」からです。実際、毒麦は実をつけるまでは麦と区別することが難しく、誤って麦まで抜いてしまう恐れがありました。神はこの主人のように、実りを信じ、忍耐してくださる方であることを、今日のたとえは示しています。
主イエスはまさに、神の忍耐をその生き方によって示されました。主イエスは人々から「徴税人や罪人の仲間」と見られていました。洗礼者ヨハネは主イエスが「悪を滅ぼす」ことを期待していたので、主イエスがなかなかそれをしないどころか、罪人との交わりを深めるのを見て疑問を抱き、「来たるべき方は、あなたですか」と問わずにはいられなくなる程でした。主イエスが来られたのは、悪の糾弾ではなく、忍耐と憐れみをもって、人々を悔い改めへと導くためだったのです。神の忍耐により神の憐れみと赦しを経験した者は、神の寛容さを、何よりもその深い愛を知ることになるからです。
しかし、人は忍耐することができません。そのことが先程の僕の言葉に表れています。「毒麦を抜き集めましょうか」と伺い調ですが、内心は早く抜いてしまいたい。なぜなら人は、忍耐をもって力を発揮される神を信頼しきれないからです。そして自分の手で確実に実りを得ようとするから、焦るのです。そして刈り取ろうとする。つまり、裁くのです。しかし、その先には神が忍耐の先に実現してくださる豊かさとは遠く離れた、貧しく、寂しい世界しか待っていません。何においても、何が正しく、何が悪なのかということは、具体的なことになればなるほど分かりにくく、識別は難しくなります。人間的な判断には限界があるのです。であれば、その限界を認め、裁きは神に委ね、自らはみ言葉に誠実に生きようとすることに励みたいと願います。
コロナ禍の今、去年やその前はどのように過ごしていたのだろうかと日記をみかえしました。すると、ちょうど三年前のこの時期は、リトリートで一人ローマ・カトリック教会の修道院に滞在し、沈黙の日々を過ごしていました。修道院ですから、日に何度も祈りの時間があります。わたしが滞在していた修道院ではそのすべてが歌によってささげられました。古いユダヤの楽器やリコーダーなどの楽器も用いられ、天上の世界と地上の世界が確かに繋がっていることを感じられるほどに豊かな祈りの時間でした。ある晩祷、驚くべきことがありました。毎度のお祈りは担当のシスターが歌をリードしますが、ある日、ほとんど声を出すことができないシスターがリードしたのです。わたしが礼拝を仕切る立場だったらどうするだろうかと考え込んでしまいました。きっと「彼女は声が出せないから、楽器をやってもらおう」というようなことにしたかと思います。けれども、その修道院ではそのシスターが声で、歌でリードしました。耳を澄ましても聴こえるかどうか、という声でした。しかし、それはとてもとても深く、神さまへの感謝、賛美を感じさせるものでした。わたしは驚きと感動とともに気付かされました。その心が大切なのであって、手段である歌のために、声を出すことが難しいシスターから賛美を奪い取るなどあってはならぬこと。それこそ、本末転倒であり、それを奪い取り、楽器をもたせようとすることこそ、毒麦を抜いてしまう人間の心ではないか、と気付かされたのです。歌うことができない。それで感謝と賛美ができないでしょうか。できるのです。神さまへの感謝と賛美を人が奪い取る権利はな

いのです。あの修道院は、そのために、本当に大事なことを見失わないために皆が注意をはらい、誰もが祝福された世界であろう、という共同体であったのだと思います。それがもっとも礼拝に表されるのです。きっと互いに忍耐しなければならないこともあるだろうと思います。しかしそれでも、シスターたちは忍耐し、祈り続け、求め続けてきたのでしょう。そして神は忍耐をもって彼女たちを見つめ、共同体を導かれ続けていると確信します。だからこそ、あの礼拝でわたしは天の国の集まりをまことにみることができたのだと感じています。もしも、人間同士が毒麦としあい、抜き合ってしまっていたら、あの礼拝は実現しないでしょう。

　だからこそ、神は毒麦をすぐに抜くことをお許しにならないのです。わたしたちはその判別ができないからです。神はひたすらに寛容と忍耐と憐れみにとどまっていてくださっています。目の前のことに囚われ、裁きあうのではなく、神にならい、神に信頼し、忍耐と憐れみをもって互いを神に愛された存在として祝福しあうこと。わたしたちの共同体がそういう共同体とされることを、心から求めましょう。人を裁き、自分を正当化することは簡単です。しかし、そこに神の望む世界はありません。今日の福音の最後にある、「正しい人々は父の国で、互いに太陽のように輝く」世界を求めて、神の忍耐と寛容、憐れみに与り、その神にこそ信頼し、その神によって結ばれた互いを信頼し、祝福し、祈り合う共同体であり続けましょう。